

ギリシアの陶器画における空間把握

田中 咲子 (南山大学)

透視遠近法が完成していなかったギリシア時代、絵画において奥行きを表現する手段の一つがいわゆる空気遠近法、すなわち色彩によって遠近感を表現する方法であった。しかしながら、今日、現存作例の数からいうとギリシア絵画の大半を占める陶器画は、基本的に多彩色ではなく、空気遠近法を用いることは不可能だった。そこで古代ギリシアの画家たちが考案したのが、透視図法に類似した視点の導入であった。すなわち、横列の人物像を描く場合、列全体を横からの視点で捉え、画面奥の人物を一つ手前の人物よりも一歩ないし半歩前へずらして描く方法である。例えば玉座に並んで座る二人を描く場合は、画面手前に座る人物の横に、奥に座る人物の顔や胸、膝が覗いている。他方、奥の人物の背中手前の人物に隠れて見えない。人物像自体は厳密な側面観で捉えられている一方、列全体は四分の三面観であるということもできる。

こうした横列の表現方法については、ギリシア美術研究では、従来から暗黙の了解のように扱われてきた。その一方、見過ごされてきたのがもう一方の表現、すなわち縦列の表現方法である。人物像を基本的に側面観で捉えるのが通例であるギリシア絵画においては、横列表現に比して縦列の表現は遥かに容易であるように思える。プロフィールで捉えた人物像を画面の右から左へと単に分散させて配置すればよいからである。しかしながら、発表者がアルカイック時代からクラシック時代の陶器画を分析してみたところ、後続の人物の体の一部、例えば足首などが、先を行く人物のそれと交差し、後続の方が先行する人物の背後に隠れて見えないことが多いことに気付いた。つまり、横列表現では全身が見えている人物像を基準にすると、画面奥の人物が半歩乃至一歩前へずれるが、縦列表現ではその逆、すなわち基準の人物の後方へ人物をずらして連鎖させる手法が用いられている。こうした表現は、縦列をなすことが文脈から判断して自明である人物群においても高い確率で認められることから、ギリシア絵画における縦列の表現方法として確立していたことが窺える。

発表者はそこで、両表現方法をいくつかの陶器画に適用して、人物の配置図を作成してみた。すると陶画家たちが両手法を駆使し、横列と縦列が組み合わさった複雑な人物配置を意図的に行っていたことが浮かび上がってきた。縦列をなす人物群を、鎖のように少しずつ重ね合わせて表現する背景には、その人物たちが画面中で一つのグループを形成し、別のグループと区別されるべきであることを明示する目的があるようである。

しかしその一方、斜列や円陣、あるいは無造作な並び方は、いわゆる人体の自然主義的な表現が発達したクラシック時代においても見受けられない。人体の把握とは異なり、空間については依然として図式的に捉え続けていたギリシア人の姿が見えてくる。